

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 5日現在

機関番号：25406

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20320038

研究課題名（和文） 中近世芸備地域の文芸とその社会的基盤に関する基礎的研究

研究課題名（英文） The fundamental research on the Literature and its social base in the Geibi region(Hiroshima Prefecture) before the Meiji Period

研究代表者

樹下 文隆 (KINOSHITA FUMITAKA)

県立広島大学・人間文化学部・教授

研究者番号：70195337

研究成果の概要（和文）：関ヶ原戦役後、毛利氏の支配を離れた芸備地域では毛利氏の文化遺産を継承していた。戦国毛利氏の後継である江戸期の萩藩も毛利氏の文化遺産の顕彰を行っていた。毛利元就・隆元・輝元時代の文芸資料は各地に伝播し、芸備では厳島関連の文芸資料、芸備以外では毛利元就関連の資料に特徴がある。江戸期の防長二国や芸備各藩では戦国毛利氏の文化政策を継承した収書活動が確認できた。戦国毛利氏の存在は、以後の芸備地域の文芸活動に大きな影響を与えたといえる。

研究成果の概要（英文）：The cultural legacy of the Mori Family, that is, the age of Motonari, Takamoto and Terumoto, was succeeded to in the Geibi region which is present Hiroshima Prefecture after the Sekigahara battle as well. The Hagi clan which is a name by the center city name of the Mori's territory of the Edo Period kept the cultural legacy of the Mori Family, too. Literary materials for the Mori Family of the Warring States Period, that is the third generation of Motonari, Takamoto and Terumoto were conveyed to each place. There are many literary materials related to Itsukushima in the Geibi region. The materials which relate to Motonari except for the Geibi region are conspicuous. The collection activities of the literary materials that the cultural policy of the Mori Family in the Warring States Period was followed could be confirmed in the Bocho region which is present Yamaguchi Prefecture and the Geibi region in the Edo Period. We think that the existence of the Mori Family of the Warring States period gave the literary activities of the Geibi region of the rest a great influence.

交付決定額

(金額単位：円)

|        | 直接経費      | 間接経費      | 合計         |
|--------|-----------|-----------|------------|
| 2008年度 | 2,900,000 | 870,000   | 3,770,000  |
| 2009年度 | 2,400,000 | 720,000   | 3,120,000  |
| 2010年度 | 2,400,000 | 720,000   | 3,120,000  |
| 2011年度 | 1,700,000 | 510,000   | 2,210,000  |
| 年度     |           |           |            |
| 総計     | 9,400,000 | 2,820,000 | 12,220,000 |

研究分野：日本芸能史

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：国文学 日本史 書誌学 文献学

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の従事者は、「毛利元就文書の基礎的研究—日本史と国語・国文学の共同研究の試み」(平成 11～14 年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2))、「蔵書形成を視点とした戦国毛利氏の文芸についての基礎的研究と旧蔵書目録の作成」(平成 14～17 年度科学研究費補助金基盤研究(A)(2))等に携わり、日本文学・日本語学・日本史学の研究者が共同研究することで、多くの成果を得ることができた。特に、一国人領主に過ぎなかった毛利氏が戦国大名へと変貌を遂げる過程で、大内氏の文化を積極的に摂取した点、瀬戸内海支配によって得た情報力や財力、石見銀山の財力を十分に活用することで、京の王権や将軍、寺社勢力と密接な関係を維持してきた点が、毛利氏の文芸活動を考える上で重要であるとの知見を得た。

毛利氏の政治的な権力拡大と文化的な蓄積とは、常に一体の関係で捉えるべき問題であり、安国寺恵瓊に代表されるような政僧の存在も、政治的活動と文芸活動とが毛利氏において密接に関係していたことを示唆している。聖護院道増・道澄は芸備地域の文芸蓄積に大きな貢献を果たしたが、彼らの安芸滞在は毛利氏と尼子氏、後には毛利氏と大友氏の敵対関係を重視した将軍の政治的配慮によるものであった。毛利氏領内の文芸活動に大きな影響を与えたと考えられる厳島や石見銀山の銀積み出し港である温泉津への京の公家知識人の来訪も、毛利氏の政治力、経済力が背景にあることは疑いない。同時に、これらの事例は毛利氏が西日本における流通の要を占有していたこと、その拠点に重要な宗教施設が存在したことも背景として指摘できよう。

このように考えると、毛利氏領内の文化的蓄積は、毛利氏の政治・経済的活動、交通・流通拠点としての毛利氏領国の重要性、領国内の社寺を核とした宗教的活動など、多様な要因がその背景にあったことがわかる。

本研究は、戦国毛利氏の文芸活動、毛利氏の支配が当該地域に与えた文化的影響、当該地域での毛利氏以後の文芸活動について、社会的基盤を明らかにしつつ解明しようとする研究の一環であり、本研究では特に芸備地域における文芸活動に着目し、毛利氏の文芸政策を明らかにするとともに、毛利氏の文化遺産がどのように継承されているのかを明らかにすることを目指している。

## 2. 研究の目的

中世末から近世初期にかけて芸備地域で行われた文芸活動について、活動を支えた政治・経済・信仰・流通などの社会的基盤に着目し、毛利氏の果たした役割と毛利氏以後の

文芸活動の特色を明らかにする。

南北朝期の武家歌人今川了俊は、「さても備後は鏡にすべき文も少なく、たまたま紙魚の住処より尋ね出でたる国文も、それをしるべとするほどの理をさへ知らぬ人のみ侍れば、愚かなる心にも欺かれ侍るかな。壁の中・石の函の中に納めける世も、かばかりやは侍るべき。」(『道ゆきぶり』)と、備後国人領主の行動規範が当時の学問である儒書・経書からほど遠いことを嘆息した。九州平定に赴く了俊にとって、南北どちらへの去就も明らかにしない芸備の国人領主たちの利己的な対応への憤懣から出た言葉だろうが、毛利氏支配以前の芸備地域は、文芸活動を擁護する強大な政治権力がなく、国人領主たちも文芸活動に不熱心だったことが読み取れる。

ところが、中国地方を統一支配した毛利氏政権時代、毛利氏政権の拠点であった芸備地域は、大内氏の文化遺産を継承し、京の文化を積極的に摂取するなど、文芸活動が活発に行われるようになった。もともと交通の要所であり経済的に恵まれた芸備地域なので、豊富な財力が文化に向けられたことで、中世末期には相当の文化的蓄積があった。毛利家旧蔵典籍や厳島神社に代表される社寺伝来の文化財の質的な豊富さがそのことを物語っていよう。毛利氏支配以後の芸備地域では、これら毛利氏時代の文化的蓄積がどのように継承されていったのだろうか。そして、どのようにして新たな文化を摂取・消化してきたのだろうか。

本研究は、宮島・尾道・三原・福山などの瀬戸内海沿岸部だけでなく、可部・高田・西条・三次・上市・庄原などの内陸部も視野に入れつつ、芸備地域の全域で毛利氏以後の文芸活動の実態を調査し、毛利氏時代の文化的蓄積がそれらにどのような影響を与えているのかを考察しようとするものである。

最終的には、芸備地域における文化拠点としての厳島の意義を明らかにするとともに、尾道・三原・福山などの瀬戸内海沿岸の港湾都市と西条・三次・庄原などの内陸部の拠点都市との差異と共通点を明らかにすることで、毛利氏の文化遺産が芸備地域全体に与えた影響を見定めることを目標としている。

## 3. 研究の方法

まず、研究従事者が分担して資料の調査・収集・解読作業を行い、そこから読み取れる毛利氏の文化政策を明らかにする。次に、研究従事者のそれぞれが、芸備地域における事例を収集・整理し、その結果得られた知見に基づいて、毛利氏時代の芸備地域の文芸活動、文化的蓄積について考察する。さらに、毛利氏支配以後の芸備地域の文芸活動がどのような社会基盤に基づいていたのかを毛利氏

の文化遺産継承という観点から検討する。

(1) 毛利家文書、毛利家家臣の諸家文書を初めとする毛利氏関係文書から文化政策に係る記述を抽出する。

(2) 厳島文書等の芸備地域に係る文書類を精査し、文化政策に係る記述、関連した社会基盤に関する記述を抽出する。

(3) これまでに把握した芸備地域での伝来が確認できる蔵書を精査し、書写事情・伝来事情を調査する。

(4) 各地の図書館・文庫などに赴き、芸備地域での伝来が確認できる蔵書を探索・調査する。

(5) 芸備地域の図書館・文庫・寺社・関係機関に赴き、毛利氏時代及び以後の政治・経済・交通・信仰・流通等に係る事例を収集・整理する。

(6) 芸備地域に伝存する典籍・文書類の保存状況について調査し、毛利氏以来の文化財行政を研究する。

(7) 芸備地域で流布したと思われる漢籍(儒書・経書)、仏書、社寺縁起等について、その流過程を探求し、伝本の詳細を調査・研究する。

(8) 関係者の協力を得て、情報交換を行うために随時研究会を実施する。

(9) 研究実施者各自が得た知見に基づき、紀要等に研究成果を発表する。

#### 4. 研究成果

(1) 大日本古文書所収「毛利家文書」、広島県史所収「厳島文書編」から文化政策に係る記述の抽出作業を行った。

(2) 山口県文書館毛利家文庫所蔵文書、『浅野家済美録』等から、文芸資料や文化政策に係る記述の抽出作業を行った。

(3) 広島県竹原市吉井家所蔵典籍、広島県安芸太田町井上家所蔵典籍、三原市立中央図書館蔵広島藩家老上田家伝来文書、御調八幡宮伝来文書、備後庄原地区伝存大山供養田関係資料、厳島大願寺所蔵中世近世文書等について書写・伝来事情を調査した。

(4) 広島県竹原市吉井家所蔵典籍、広島県安芸太田町井上家所蔵典籍、三原市立中央図書館蔵広島藩家老上田家文書については、目録を作成した。

(5) 『厳島縁起』、『元就記』、『啓迪集』、『房頭記』、『厳島宝前和歌』、『厳島奉納和歌』、『鳥類八百首』等の伝本を確認し、そのうち購入した『厳島縁起』1本、厳島神社蔵瀧戸本『房頭記』、『厳島宝前和歌』、『厳島奉納和歌』、『鳥類八百首』を翻刻した。

(6) 上記の調査・研究の過程で得た新知見を、5. 主な発表論文等に掲げたように、各自が論文として公表した。

上に記したごとく、研究従事者それぞれが芸備地域の文芸とその社会的基盤に関する

調査・研究の成果を公表している。この報告書では、研究成果の総論として、戦国毛利氏の文化政策の意味、江戸期の萩藩及び芸備各藩の文化政策、芸備地域に伝存する毛利氏の文化遺産についての概要を以下に示す。

毛利氏の文化政策として、まず文化面で戦力となりうる家臣の獲得と育成が挙げられる。樹下が「永禄四年雄高山日記」を手がかりに、この時期に文化的な職能者を家臣団に組み込んだと推論して学会で発表したように、毛利氏の文化政策は、毛利両川体制の確立と平行して行われており、戦国大名として芸備を支配下に収める上で、文化面を充実させることが急務だったことが窺える。永禄4年、毛利元就父子が小早川氏の居城である雄高山城を訪れたのは、元就三男の隆景を養子として迎えた小早川家の家臣団と毛利家の家臣団の団結を強め、来るべき対尼子戦に備えることが第一の目的であった。しかしながら、この一週間の滞在を記した「永禄四年雄高山日記」には、室町将軍御成と見まがうような盛大な饗応の様子が描かれている。毛利家も小早川家もこの饗応のために一年以上前から準備をしていた。この事実は、正親町天皇の即位料を皇室に献上した功績による任官、将軍家による相伴衆入りを果たした毛利氏が、将来の将軍御成に備えていたことを示している。毛利氏が室町幕府重臣渋川氏を厚遇し、室町幕府の文化事業に関与した大和宮内の子孫が毛利家に仕えた事実を突き止めることができた。これらも、毛利氏の幕府中枢への参入の意欲を示す事例であろう。

こうした動きは、大内氏と同盟を結び、隆元が山口に滞在した時から始まっていると見ることができる。事実、大内氏を倒した陶氏を亡ぼした毛利氏は、大内氏が担っていた幕府への参与を引き継ぐ立場にあった。尼子及び大友との対立に際し、将軍家から聖護院道増、道澄が安芸に派遣されたのも、幕府の毛利氏重視政策の現れであった。尼子戦の最中には、同様に医師の曲直瀬道三が派遣されている。また、飛鳥井家の厳島滞在と鞠及び歌道の伝授も、毛利氏及び将軍家の意志に基づくと見てよかろう。信長政権による幕府崩壊後も、毛利氏の幕府中枢への参入意欲、つまりは皇室・貴族への働きかけの意欲は衰えていない。元亀二年の厳島神社遷宮に吉田兼右が招聘されているのは、天文年間に兼右が大内氏領内を訪れていたことと関係がある。

秀吉政権への参入後、毛利氏の文化政策はより活発化する。秀吉政権に参画した大名の中でも、毛利氏は特に高い文化水準をすでに誇っていたが、秀吉の下で進められた新しい文化政策をも、毛利氏は精力的に摂取していた。戦国毛利氏は、秀吉政権において諸大名中で最も高い文化水準を維持していたことは疑いない。

関ヶ原戦役により防長二国に封じられ、萩藩となった毛利家では、戦国毛利氏の遺産を調査・顕彰する動きが恒常的であった。また、歴代藩主も、新たな収書活動を行っている。このような萩藩の文化政策は、毛利氏の跡を襲った浅野家にも刺激を与えたことと考える。浅野家の歴代藩主も萩島を中心に戦国毛利氏の文化遺産の継承に努めるとともに、秀吉政権下の武将を召し抱えて、その文化遺産の継承にも努めている。

芸備地域には、戦国毛利氏の文化遺産というべき資料が現在においても多くの地で確認できた。これらは、芸備にとどまって豪農化した毛利家旧臣の子孫によって保持されてきたものと推測される。そのほとんどが江戸期の写本であり、この事実が江戸時代を通して毛利の文化遺産が伝播していたことを物語っている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計16件)

石川一、岩国徴古館蔵『鳥類八百首』翻刻、県立広島大学人間文化学部紀要、査読無、7号、2012、196-206

樹下文隆、能<竜虎>の背景—禅林の周易受容と神仙趣味—、文学、査読無、12巻5号、2011、66-77

樹下文隆、室町後期における禅林の嗜好と謡曲、アジア遊学、査読無、142号、2011、162-169

西本寮子、文学編、『広島県謎解き散歩』、新人物往来社、査読無、2011、232-241

松井輝昭、萩島神社の海上社殿と龍神信仰—新たな聖地のアイデアをめぐって—、中世文学、査読無、56号、2011、40-48

石川一、『萩島宝前和歌』『萩島社奉納和歌』校注、県立広島大学人間文化学部紀要、査読無、6号、2011、218-226

大知徳子、吉川元春書状と萩島神社の元龜二年遷宮、宮島学センター年報、査読無、2号、2011、21-28

樹下文隆、萩島の能楽と桃花祭神能の成立をめぐって、宮島学センター年報、査読無、2号、2011、11-20

松井輝昭、萩島門前町の宗教空間構造に関する一試論—ケガレの処理方法を手掛かりとして—、宮島学センター年報、査読無、2号、2011、1-9

西本寮子、元就没後の毛利氏周辺—文芸関係資料を手がかりとして—、芸備地方史研究、査読無、271-272号、2010、13-30

秋山伸隆、豊臣期における石見銀山支配、龍谷史壇、査読無、132号、2010、1-14

大知徳子、史料紹介 毛利輝元書状と御鳴廻、

宮島学センター年報、査読無、1号、2010、41-47

樹下文隆、翻刻・県立広島大学蔵『萩島縁記』、宮島学センター年報、査読無、1号、2010、29-40

松井輝昭、萩島内侍称揚譚の成立とその背景—藤原信西の子息たちの書状を中心に—、県立広島大学人間文化学部紀要、査読無、5号、2010、132-146

松井輝昭、萩島神社蔵瀧戸本『房頭記』の紹介とその意義、宮島学センター年報、査読無、1号、2010、12-28

石川一、慈円『仙洞句題五十首』『最勝四天王院障子和歌』校注、県立広島大学人間文化学部紀要、査読無、5号、2010、147-160

秋山伸隆、萩島研究の成果と課題—戦国期研究の立場から—、萩島研究、査読無、5号、2009、68-74

[学会発表] (計8件)

松井輝昭、中世萩島神社における弁財天信仰の成立—福神信仰との関わりをめぐって—、広島史学研究会、2011年10月30日、広島大学

樹下文隆、地域と大学を結ぶ宮島学の取り組みと萩島の芸能、実践経営学会第53回全国大会、2010年9月10日、広島県情報プラザ

松井輝昭、萩島神社の海上社殿と龍神信仰、平成22年度中世文学会秋季大会、2010年10月23日、県立広島大学

石川一、慈円『法楽百首群』の位相、皇学館大学神道研究所公開学術シンポジウム、2009年11月28日、皇学館大学神道研究所

大知徳子、戦国期萩島神社の神事・祭礼—榎守房頭と大願寺—、芸備地方史研究会大会、2009年7月5日、県立広島大学

松井輝昭、戦国時代の萩島神社における天神社建立の史的意義、広島史学研究会、2009年10月25日、広島大学

樹下文隆、萩島の能楽と桃花祭神能の成立をめぐって、能楽学会第7回大会、2008年5月19日、早稲田大学大隈小講堂

樹下文隆、「毛利元就父子雄高山城滞留日記」をめぐって、芸能史研究会第45回大会、2008年6月1日、同志社女子大学今出川C

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

樹下 文隆 (KINOSHITA FUMITAKA)  
県立広島大学・人間文化学部・教授  
研究者番号：70195337

##### (2) 研究分担者

秋山 伸隆 (AKIYAMA NOBUTAKA)  
県立広島大学・人間文化学部・教授  
研究者番号：60142337

石川 一 (ISHIKAWA HAJIME)  
県立広島大学・人間文化学部・教授  
研究者番号：80193283  
大知 徳子 (OCHI NORIKO)  
県立広島大学・地域連携センター・助教  
研究者番号：50549243  
(H21～)  
五條 小枝子 (GOJO SAEKO)  
県立広島大学・総合教育センター・講師  
研究者番号：20118045  
菅原 範夫 (SUGAHARA NORIO)  
県立広島大学・人間文化学部・教授  
研究者番号：90117010  
(H20：連携研究者)  
西本 寮子 (NISHIMOTO RYOKO)  
県立広島大学・人間文化学部・教授  
研究者番号：70198521  
(H20：連携研究者)  
松井 輝昭 (MATSUI TERUAKI)  
県立広島大学・人間文化学部・教授  
研究者番号：70310836

(3)連携研究者

菅原 範夫 (SUGAHARA NORIO)  
県立広島大学・人間文化学部・教授  
研究者番号：90117010  
(H20)  
西本 寮子 (NISHIMOTO RYOKO)  
県立広島大学・人間文化学部・教授  
研究者番号：70198521  
(H20)